

特集

昔と今、変わる創傷(きず)治療。



普段ちょっとしたことできる「すり傷」「やけど」から、「交通事故などの外傷」「裾創(とこずれ)」「糖尿病の足の壊疽(腐る)」など、創傷(以下、傷と記載)といつても、浅いものから深いものまでいろいろな種類があります。傷の種類によって治療の方法や使用するお薬も異なりますが、基本的な傷治療に対する考えは共通します。その考えですが、皆さんがよくご存知の従来のものと、現在とでは違ってきています。経験や研究により、従来の治し方では傷の治りが遅れることが分かってきました。そして、現在傷の治癒に必要な方法として常識と考えられていることは…!?

傷は必ず消毒する。

カサブタは、傷が治る時にできる、またはカサブタができたら傷は治る。

傷の深さや傷の細菌の種類によっては必ずしも間違いではないのですが、新しい傷の治し方としては随分変わってきています。今まで、これらを当たり前のこととして考えていた方も多いのではないでしょうか。でも残念ながら、これでは傷の治りを遅らせる場合もあるのです。

え!? 今までの傷の治し方って、ダメなの!?

今まで、傷ができた時に治療する際、医師の指導・治療法、ご家庭での治療法の代表的なものとして、以下のように考えていませんでしたか?

傷口にはガーゼを当てる。

傷は赤チンなどを塗って乾燥させなければならぬ。

傷は水で洗ったりお風呂に入ったりして、濡らしてはいけない。

薬は殺菌力の強いものを使わなければならぬ。

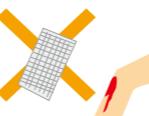
昔の非常識は、今の常識!?



正しい治療法を知って、早くキレイに傷を治そう!



傷は可能な限り強い消毒をしない。強すぎる消毒は新しくできる皮膚の細胞の発育を阻らせたり、接触皮膚炎(かぶれ)を起こして、傷の治りが遅くなることがあります。



傷にガーゼをあてることは間違いではないのですが、深い傷にガーゼを当てるだけだと傷にガーゼがくっ付いたり、乾燥することで傷が痛んで傷の治りが遅くなることがあります。軟膏をガーゼにたっぷりつけて傷を保護するか、新しい被覆剤(ドレッシング剤)を用いて早く傷を治すことをお勧めします。



傷は洗いましょう。ヨゴレや膿を水で洗い流することで、消毒よりも効果的に細菌を取り除いて治癒を促進させます。



以前は赤チンに代表されるように傷を乾燥させてカサブタになるように治す治療法が主でしたが、カサブタの下には膿がたまり、傷の治りが遅くなることが知られています。最近は傷に適当の湿潤(湿り気)を保つような軟膏やドレッシング剤で保護して早く傷を治す考えになっています。



薬は医師の指定した、出来る限り優しいものを使用しましょう。薬局で売っている薬には傷の消毒や治療には強すぎて、傷を治すのに必要な皮膚や血管の細胞を傷つけて、傷の治癒を遅くすることがあるからです。

私たち
形成外科医は、
傷の専門家です。

傷&傷跡の治療のスペシャリストがいるのは、形成外科です。様々な「皮膚の傷」のお悩みはこちらへ相談してください。

なお、傷は、早い処置ほど「早くきれいに」治ります。特に深い傷の場合、傷ができるから直ぐか、遅くとも24時間以内に急いで専門家のところへ行き、正しい処置と指導を受けてください。自己流は返って傷が悪くなり、傷跡も残ることになるのでキケンですよ!



説明は、
徳島大学病院
形成外科・美容外科長
中西 秀樹 (なかにし ひでき)
■問い合わせ 形成外科外来
tel.088-633-7047